

## 保護者のみなさまへ

### なかまづくり はじめのいっぽ ふみだそう😊

はじめまして。わたくしは、国立能登青少年交流の家 企画指導専門職の酒井伸大（さかい のぶひろ）と申します。

今年度も、幼小いっしょに！のとまり会を企画します。「あと数か月で卒園か。もうすぐ1年生だな。」「1年生も半分が過ぎたな。これでいいのかな。」「今のうちに身につけておくことは他にないのかな。」など、お子様の自立を実感しつつも、保護者としての悩みはつきないのではないのでしょうか。

今年度は、特に保護者同士、そして子ども同士の「仲間づくり」「人間関係づくり」を中心に据えて、企画しました。保護者同士の子育ての悩みや不安、期待などを、「子育てのとトーク」で伝えあったり、お話を聴いたりしませんか？また、できるかできないかという結果ではなく、自分の身の回りのことに目を向け、少しでも何かにチャレンジしようとする子どもたちを職員・ボランティアが全力でサポートします。例えば、こんな姿が見られたら素敵ですよ。

- ・少しでもできるようになろうとチャレンジする姿
- ・仲間がしてほしいことに気づき、自分から行動する姿
- ・仲間のがんばりにはくしゅを送る姿
- ・仲間を待ったり、手をつないだりする姿
- ・お家の方を驚かせようとはりきって準備する姿
- ・そんな自分をほめてもらい、自信を深める姿・・・etc

まだまだ書き足りません。想像するだけでわくわくします。こうした「親切・思いやり」「やさしさ」「楽しさ」あふれる時間を、この国立能登で過ごしませんか？  
たくさんのご応募お待ちしております。



National NOTO Youth Friendship Center

国立能登青少年交流の家

# 令和5年度「幼小いっしょに！のとまり会」構想図

## 幼児教育の現状と課題

子どもを取り巻く様々な環境の変化  
家庭・地域の教育力の低下 運動能力の低下  
自然体験・社会体験・生活体験の不足

言語表現や集団とのかかわりの中で自己表現する力の不足

小1プロブレム（幼小連携の必要性）小1の壁（保護者同士のつながり）



のとまり会で  
育てたい！

### 自立心

- 一人で着替え・入浴・睡眠ができる。
- 身の回りのことは自分でできる。

### 気付く

知識および  
技能の基礎

### ためす

思考力、判断力、  
表現力等の基礎

### 自信

学びに向かう力、  
人間性の基礎

### 協働性

- 異年齢の仲間と協力して、様々な活動にチャレンジする。
- 互いに助け合ったり、教えあったりする。

### 社会生活との 関わり

- 自分の気持ちをチームの仲間やボランティア・職員に、言葉で伝える。
- お家の人に喜んでもらえるよう企画・運営をする。

事業を通して育ててほしい姿

仲間づくりを通して、自分や友達の良さに気づき、  
自信をもって取り組む子ども

令和5年度 教育事業  
「幼小いっしょに！のとまり会」

1 趣旨

小学校に入学したばかりの子どもが、周りの児童と良好な人間関係を築けず、学校生活になじめずにいる状況を問題と捉え「小1プロブレム」と呼ぶ。本事業では、こうした問題へ対応できるよう、低年齢期における異年齢集団での共同生活体験を通して、「自立心」「協同性」「思いやりの心」を育み、何事にも自信を持って取り組む子を育てる。小学校入学を機に子どもの生活リズムや環境に変化が生じ、保育園や幼稚園時代と比較して仕事と子育ての両立が難しくなると言われる「小1の壁」。本事業では、子どもの姿や講話などを通して子育てについて学んだり、保護者同士が情報交換を行ったりする機会を設ける。地域や年代を超えた保護者同士のつながりを構築し、子育てへの思いを共有する場とする。

2 日程

- (1) 期 日 【第1回】 令和5年10月22日（日） 日帰り  
【第2回】 令和5年10月28日（土）～29日（日） 泊2日
- (2) 参加者 【第1回】 年長児14名、小学1年生7名、小学2年生11名、保護者34名  
【第2回】 年長児13名、小学1年生7名、小学2年生11名、保護者37名

(3) 研修内容

10月22日（日）【日帰り】	
10：00～受付 10：30～はじまりの会（アイスブレイク①） 11：00～なかよしタイム（アイスブレイク②） 11：45～昼食  <div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 45%;"> <p>【子ども】</p>           13：00～なかまでフードハントゲーム            13：40～クレープ作り            14：30～保護者と会食             15：00～おわりの会 ふり返し                      ふり返し後 解散         </div> <div style="width: 45%;"> <p>【保護者】</p>           13：00～子育てのとトーク（トークセッション）                      講師：小林 真氏（富山大学 教授）            14：30～子どもと会食         </div> </div>	
10月28日（土）	10月29日（日）
11：00～受付 11：30～はじまりの会（アイスブレイク③） 12：00～昼食 13：30～なかまと歩こう のとウォーク（往路） 14：15～なかまと協力！砂像づくり 15：45～なかまと歩こう のとウォーク（復路） 17：00～イブニングタイム 17：30～ベッドメイク・入浴準備 18：00～夕食 19：00～入浴 20：00～就寝準備 20：20～絵本の読み聞かせ 講師：絵本専門士 赤池氏・浜田氏 21：00 就寝	6：00 起床・洗面・掃除 7：00～フレッシュタイム 7：30～朝食 8：40～宿舎確認 9：00～ハロウィンパーティー大作戦 Part 1 秋の自然探検・ハロウィン衣装づくり 11：00～ハロウィンパーティー大作戦 Part 2 なかまと作ろう！カートンドッグ 12：30～ハロウィンパーティー 成功させよう！なかまといっしょに お家の方をおもてなし！ 14：00～終わりの会 振り返り

### 3 成果と課題

#### (1) 活動プログラムの実際

##### ①フードハントゲーム【子どもプログラム】

異年齢の集団で協力し合いながら「協同性」を育むプログラムである。

フードハントゲームは、施設建物の写真を手掛かりに、その場に行き、食材カードを探すゲームである。年長児・1年生・2年生3～4人によるグループ編成を行い、午後の活動「クレープ作り」に必要な食材カードを集めることにした。食材カードを集めれば集めるほど、班の仲間と作るクレープの具材が増えるため、どの方向に進むべきか班の仲間と相談したり協力したりして、仲間と一緒に力を合わせて取り組む第一歩を踏み出すことができた。



【フードハントゲーム】

##### ②トークセッション

保護者同士の「つながり」「共有」を支援するプログラムである。富山大学教授の小林真氏を講師に招き、「子育てのとトーク」と題してトークセッションを実施した。事前に実施したアンケート結果を「社会的スキル」「育児ストレス」「幼小の接続」の3つに分類・整理し、対話の視点とした。日頃の子育てについて子どもと同じ班の仲間と対話することで、抱えている悩みや不安が固有の悩みではなく、誰もが感じているものだという事に気付いていた。特に少子化が進み、保育者や教員とのつながり、保護者同士のつながりが少ないと感じる保護者ほど、対話による共有の効果を感じていた。小林教



【トークセッション】

授から「自然体験を通して育まれる感性や人間関係調整力」について、自身が携わる先進事例を紹介しながら、本事業の意義や期待される効果について説明があり、本事業に対する保護者の理解がより深まった。「子どもとの普段の接し方を見直そう」「ずっと言えない悩みがあったが、他の保護者に話を聞いてもらって少し楽になった」等、子どもとの関わり方や保護者同士のつながりについての感想が多かった。

##### ③クレープ作り

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。子ども達は、フードハントゲームで集めた食材を使い、自ら調理したクレープを保護者へプレゼントした。仲間と協力して、道具の準備や調理をするとともに、保護者に日頃の感謝の気持ちが伝わるように心を込めて焼き上げ、デコレーションするなど、世界に一つしかない特別なクレープ作りに取り組んだ。

保護者は、子ども達が調理する姿を見て「子ども達だけで力を合わせて作るなんてすごい」と驚き、子どもからクレープと言葉のプレゼントをもらって感激した様子だった。また、保護者も、半日子どもと離れて感じた思いを子どもに伝えるなど、親子間での温かな交流の場にもなった。



【クレープ生地焼き】



【デコレーション】



【保護者へのプレゼント】

#### ④なかまと歩こう のとウォーク（往復約6km）

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。事前アンケートでは、「散歩をしない・あまりしない」割合が39%と最も多く、散歩をする層も「週に1～2回程度」「往復で10～20分以内」と回答した割合が最も多かった。こうした実態から、仲間と一緒に歩くことを仲間づくりの中心に据えて企画したいと考えた。当日までに担当で3回下見・散歩を実施し、ルートの選定や危険箇所の洗い出しに努めた。当日は、交通ルールを集団で守り、上級生が下級生、年長児を気遣いながら、海岸まで往復して歩くことができた。特に歩道側を年長児にして手をつないだり、まとまって横断できるような隊列を整えたり、声をかけたりする姿は目を見張るものがあった。年長児は、こうした小学生の姿に勇気づけられながら元気に歩いていた。



【仲間と歩こう！のとウォーク】

#### ⑤なかまと協力！砂像づくり

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。異年齢の集団で関わり合いながら活動する力を高めるためのプログラムである。いくつかのキャラクターの中から砂像で表したいものを話し合っ  
て決め、制作した。砂を固める、水を運ぶ、穴を掘るなど、役割を分担したり、共に作ったりして、協力して作業できた。互いに考えを伝え合い、一つのを完成させた時の満面の笑みから、充実感・達成感を味わうことができたようだ。



【仲間と協力！砂像づくり】

#### ⑥イブニングタイム・フレッシュタイム

「自立心」「協同性」を育むプログラムである。団体間交流を目的とした「イブニングタイム」（タベのつどい）、生活リズムを整えることを目的とした「フレッシュタイム」に、団体として参加した。イブニングタイムでは団体紹介を、フレッシュタイムでは司会係と旗係、団体紹介を子ども達が行った。「やってみよう！」という子どもの主体性を大切にするため、立候補制とした。立候補した子は勿論、それ以外の子どもも話を最後まで話を聞いたり、拍手したりするなど、自分  
ができることを見つけて実行していた。



【進んで！フレッシュタイム】

#### ⑦基本的な生活態度（ベットメイキング・入浴・食事・歯磨き・掃除・片付け）

「自分のことは自分でする」を合言葉に、「自立心」「思いやりの心」を育むプログラムである。ベットメイキングでは、宿泊経験のある年長児～2年生がベッドメイキングの実演と解説をし、それを手本に、自分のシーツを敷き、枕カバーを被せた。1人では難しい時は、同室の仲間に頼り、助けをもらいながら準備することができた。食堂で4回食事を摂ったが、回数を重ねるたびに、食事マナーが向上した。特に食べ残し、食べこぼしが激減した。また、おかず、ごはん、みそ汁など自分の食事は自分で配膳し、食品ロスにならないよう、分量を考えて盛り付けることができた。入浴では、着替えを準備したり、自分で体と頭を洗ったりした。就寝前の歯磨きも含めて、普段は保護者に頼ることの多い身の回りのことを、自分の力で整えることができた。



【ベットメイキング】



【食事の配膳】



【シーツの片付け】

絵本専門士を2名講師に招き、読み聞かせを実施した。就寝前にすることをすべて済ませ、いつでも寝られる状態にして読み聞かせを聞いたことで、気持ちよく入眠することができた。絵本専門士には、あらかじめ当日の子ども達の学びを伝え、3つのねらいに合う「自分のことが自分でできる本」「仲間づくりの良さを感じられる本」「思いやりの心を育む本」、そして「おやすみの本」を選定して読んでいただいた。自分たちの目指す姿とタイアップした本の内容に、真剣に話に聞き入り、絵本の世界に浸っていた。



【絵本の読み聞かせ】

#### ⑨ハロウィンパーティー大作戦 Part 1

「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。道具を安全に使うって自分の想像したものを作る活動である。Part 1では、班で協力して落ち葉やススキ、どんぐりなどを採集し、それらをテープなどで張り付け、世界に一つだけのオリジナル衣装に仕上げた。採集したものをお裾分けしたり、班の仲間の制作をまねしたりして制作を進めることができた。



【秋の自然採集】



【ハロウィン衣装づくり】

#### ⑩ハロウィンパーティー大作戦 Part 2

「自主性」「協同性」「思いやりの心」を育むプログラムである。迎えに来る家族のために、カートンドックを作った。「お母さんはサラダが好きだから大盛りにしよう」など家族のことを思いながら作る姿は、1回目のクレープ作りよりも多く見受けられた。手洗いや消毒、火の使い方など衛生面・安全面にも気を付けながら作業した。また、ハロウィンパーティーの司会は「やってみよう！」という子どもの主体性を大切にするため、立候補制とした。立候補した子は司会進行の練習を班の仲間に観てもらうことで、自信を深めていた。



【カートンドック作り①】



【カートンドック作り②】



【司会進行】

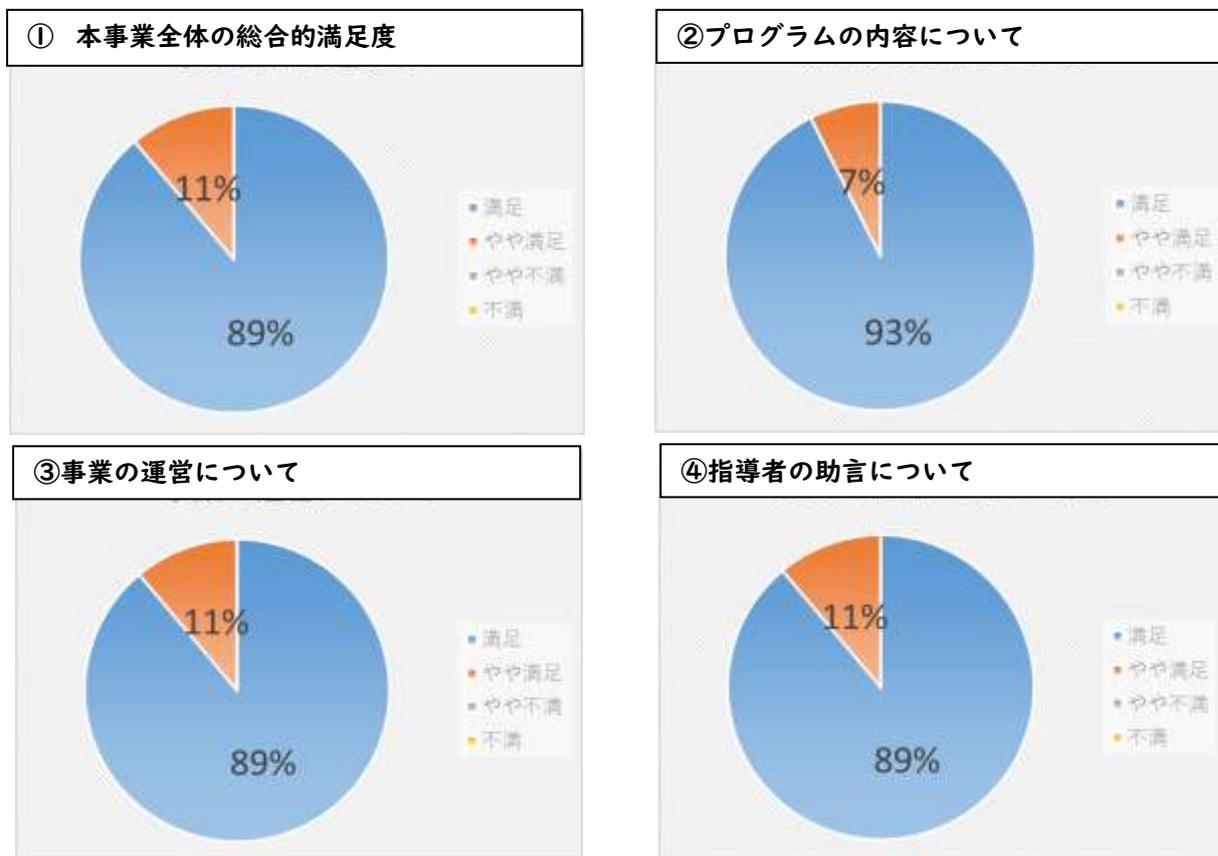
#### ⑪成功させよう！仲間といっしょにハロウィンパーティー

パーティーでは、短い言葉を1人1人がつなぎながら、子ども達が自らの手で会を進めることができた。準備したハロウィン衣装を身にまとい、家族に手作りのカートンドックを振る舞った。食事中は、どんな気持ちで作ったかを話したり、自分ががんばったこと、できるようになったことを伝えたりするなど一泊二日の出来事を話した。「堂々と手をひく姿にびっくりした」「話から充実ぶりうかがえた」など、集団生活を通しての我が子の成長を実感する保護者が多かった。

## (2) アンケート結果について

### ①保護者

事業評価を目的とし、保護者を対象に、4段階での満足度アンケートを実施した。



上記の結果から、①は昨年度比3%上昇した。②③④については昨年度と同程度であった。以下に、子育てのとトークに関する保護者の声をいくつか紹介する。

同じ年代の親御さん達と思いを共有できてよかった。  
同じような悩みがあった安心した

おうちの中だけでとせめていた事を、いそがしに話した事で、  
すこし気楽になりました。  
す。ありがとうございました。

小1児や小2児を持つ保護者の方に  
直接「小1の壁」についてお話を少し聞けた良かったです。

左記にあるように、日帰り後に、保護者にとってアンケートの自由記述には、子育てのとトークで得た保護者同士のつながりや不安や悩みを共有できたことへの喜びや安堵が多く寄せられた。このことから、今後『小1の壁』に直面する保護者、まさに直面している保護者、それぞれの経験や立場で語り合うという意義は大きい。

宿泊後の保護者アンケートの自由記述から、一部を抜粋して紹介する。

- ・初めは子どもの成長のためと思い、応募したが、親にとっても必要な時間だったと感じる。
- ・まだまだ、毎日手がかかると思って子育てしていたが、これからはもっと子ども達の力を信じて、見守っていこうと思う。
- ・一泊して会った子どもの顔が生き生きして成長を感じた。
- ・家ではできないことを、初めて会った友達と、親から離れて経験でき、本人の自信につながった。
- ・子ども達が主体で決めていくプログラムはとても良かった。

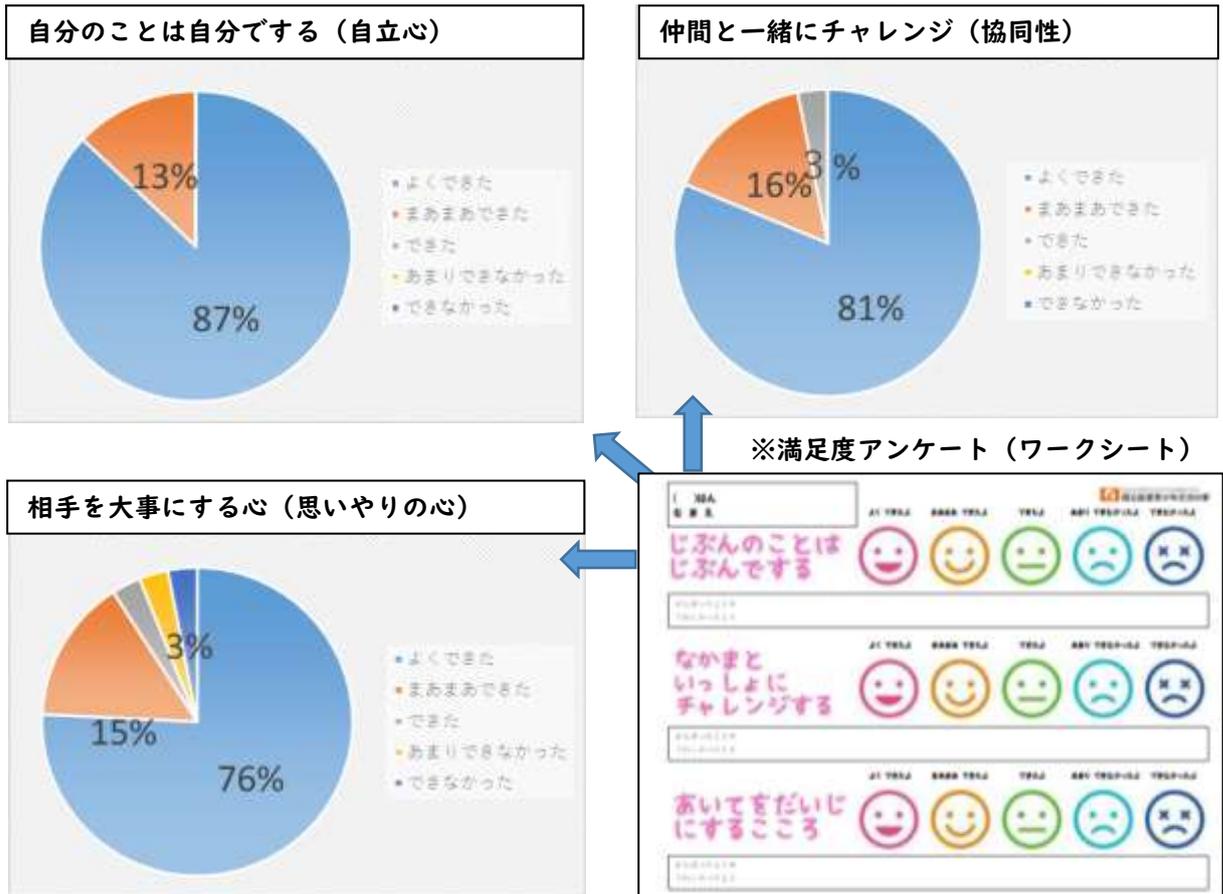
## ②参加者

事業評価を目的とし、参加者を対象に、5段階で満足度アンケートを実施した。

書くことに習熟の差が認められるため、事業を通して確認してきた以下の3つのめあてについて聞き取りを行い、最も当てはまるものに○をつけてもらった。

- 「自立心」 (＝自分のことは自分ですること)
- 「協同性」 (＝仲間と一緒にチャレンジすること)
- 「思いやりの心」 (＝相手を大事にすること)

また、「どうしてそう思うの?」と理由を問い、必要に応じてスタッフが代筆してワークシート(※)に書き残した。結果を以下に示す。

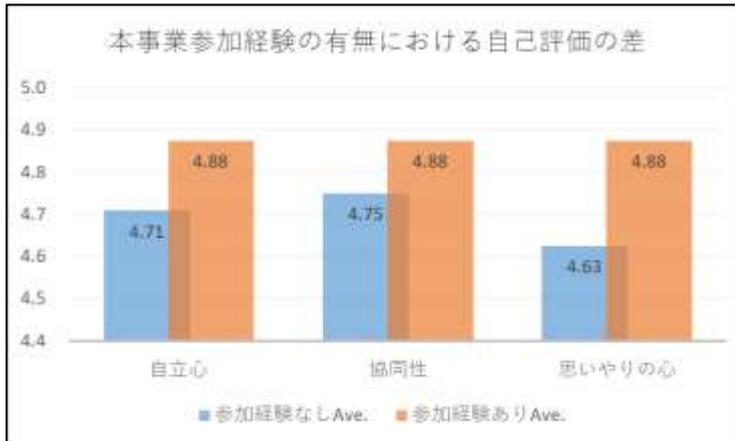


いずれの項目も、30名が「よくできた・できた」と積極的肯定または肯定的回答をしている。理由を問う自由記述では「散歩」「砂像」「カートンドッグ」といった活動や「仲間と」「協力して」という相手意識、「○○(友達や保護者)のために」という目的意識のある記述が多かった。このことから、事業で身につけてほしい態度を、主担当の職員がはじまりの会で伝えるだけでなく、スタッフ全員が、事業を通して3つのねらいを常に意識したアプローチをしたことが、子どもにも伝わったと考えられる。一方で、「3～1」と回答した2名は、いずれも本事業でより支援を要した子で、日頃の基本的生活習慣に課題が多いためではないかと考えられる。

昨年度から継続して本事業に参加した子どもは8名である。当施設のように、年度ごとに主担当の職員が替わると、本事業がどれほど子どもに浸透しているのか、そして事業後に行動や意識の変容があるのか、追跡調査することは容易ではない。そこで、事業への参加が子どもにどれほどの影響を及ぼしているのか、次ページに示す関数を使って分析することにした。

③事業への参加が子どもの自己肯定感（自分に対する自信）に及ぼす影響について

参加者の回答から、AVERAGEIF関数を使って、特定の条件（事業参加の有無、学年、回答）に一致する数値の平均を算出し、比較してみた。すると、次のようなことが明らかになった。



左のデータから、本事業に参加経験のある子どもの方が、参加経験のない子どもより、「自立心」「協同性」「思いやりの心」ともに数値が高い傾向が見られた。本事業へ参加することで、自分に対する自信を深めていることが分かる。本事業が果たす役割を再確認するとともに、今年度初めて参加した子どもには、次年度以降への参加につなげたい。



左のデータから、学年が上がるにつれ、「自立心」「協同性」の数値が高い傾向が見られた。仲間づくりを通して育みたい各学年の具体的な姿を明確にした支援が子どもの自己成長の自覚につながったといえる。一方、「思いやりの心」では、2年生の数値が1年生と比較して低いが、低く回答した子はいずれも積極的な関わりが多く、責任感の強さが低い回答につながった可能性がある。

(3) 成果と課題

①成果

- ・職員、ボランティアスタッフ（以下スタッフ）による事前の打合せで、本事業を通して育みたい3つの柱を、意識レベルではなく、具体的な行動レベルまで落とし込んで、共通理解を図ることができた。ふり返り時やミーティングでも3つの柱を再度確認し、特に保護者に、子どもの良さががんばりを具体的に伝えることで、保護者の事業への信頼を得ることができた。
- ・保護者同士の「つながり」と「共有」を、保護者向けの柱に据えた。特に、日頃から悩みや不安を吐露したり事業に参加したりする機会の少ない保護者にとっては、専門家の知見を得て、保護者同士で語り合えたことで、子どもとの関わり方を見つめ直すよい機会となったようだ。
- ・子どもと保護者が対面する場面に、子どもの3つの柱と保護者の2つの柱が連動するように、職員、スタッフの役割を明確にしたプログラムを構築できたことも良かった。
- ・プログラムに時間的ゆとりを持たせたことで、班での作戦会議や準備に充てることができた。
- ・保護者と離れての生活に精神的ストレスを感じていた子もいたが、同じ班の仲間が温かな声をかけ、励まし合うことで、気持ちを立て直し、前向きに活動に取り組むことができた。
- ・「とても楽しかった」「ずっと泊まりたい」など、肯定的な回答が数多くあった。

②課題

- ・野外での活動がメインであったため、トイレに想定以上の時間が掛かった。発達段階を考慮して、トイレの場と時間を確保しながら、活動の展開を工夫していく必要がある。
- ・見られた良い関わりを、全体で共有する時間をもっとあって良い。（班から、スタッフから）
- ・意図的な作戦会議のさらなる充実と、自主的な作戦会議の時間を確保する。